

Economic Indicators

定例経済指標レポート

テーマ：景気動向指数（2012年10月）

発表日：2012年12月7日（金）

～基調判断は「悪化」へと2ヶ月連続下方修正。ただし、下げ止まりの兆しも～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 主席エコノミスト 新家 義貴
TEL:03-5221-4528

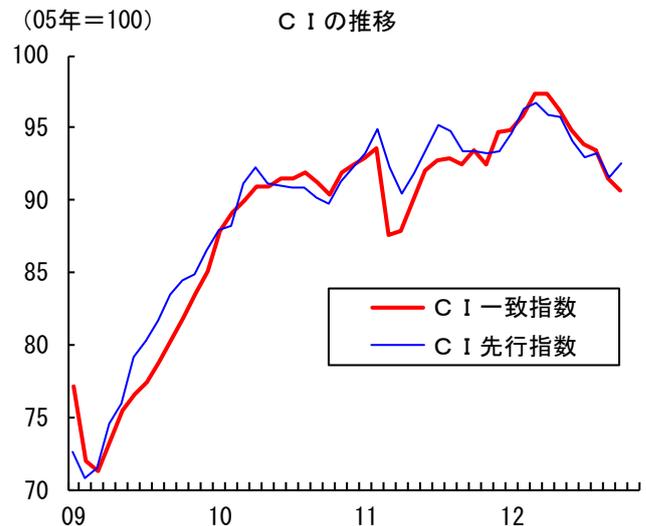
内閣府から公表された2012年10月の景気動向指数では、C I一致指数は前月差▲0.9ポイントと、7ヶ月連続で低下した。採用系列のうち、鉱工業生産指数は上昇したが、耐久消費財出荷指数や大口電力使用量の減少が大きく、C I全体で見ればマイナスになっている。

一方、C I先行指数は前月差+0.9ポイントと上昇した。日経商品指数や消費者態度指数は低下したが、住宅着工床面積や在庫関連の系列のプラス寄与が大きく、全体としてもプラスに転じている。

10月のC I一致指数の低下を受け、内閣府による基調判断は「悪化」へと、2ヶ月連続の下方修正となった（8月までは「足踏み」、9月は「下方への局面変化」）。内閣府の定義では、「悪化」とは「景気後退の可能性が高いことを示す」とされている。

実際、一定の仮定を置いてヒストリカルD Iを試算すると、4月以降50%を割り込んでいることが確認できる。3月をピークとして景気が後退局面に入っていることがC Iからも追認された。

もっとも、基調判断下方修正の一方で、足元では景気底打ちの兆しも散見される。先日公表された鉱工業指数も、10月の実績が予想を上振れ、11、12月の予測指数も強い結果となっており、生産下げ止まりを示唆する結果となっている。C I一致指数には生産関連の系列が多く採用されていることを踏まえると、C Iがそろそろ下げ止まってもおかしくない。この場合、景気後退局面は早ければ年内にも終息する可能性があるだろう。依然として輸出の悪化が続いている点は気付きだが、今後は景気に多少明るさが出てくるのではないだろうか。



(出所)内閣府「景気動向指数」